
東方幻実神

Erius

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方幻実神

【Nコード】

N0414Z

【作者名】

E r i u s

【あらすじ】

交通事故で死んだ主人公。しかし、その魂は創造神の元に。転生させられた主人公は世界の頂点に立ち、何を見る？ ・主人公チート、独自設定等の要素を含みます。 ・理想は一日一話、早くて三日に一話、遅いと一週間に一話ぐらいが目安です。

第一話：世界神の誕生（前書き）

皆さん始めまして。

簡単にですが、いくつか注意をば。

まず、この作品はもともとオリジナル作品の予定だったことです。要するに、独自設定がすごいです。

次に、これが初作品です。一応書き直しではありますが、初作品です。

多少の粗末な文章、意味不明な点は見逃してくださるとありがたいです。

では、どうぞ。一話でも読んでくださればありがたいです。

第一話：世界神の誕生

不運にも交通事故で亡くなった一人の男がいた。

特に出来ないこともなく、しかし完璧にできる物は無い、平均的な男だった。

彼の魂は偶然か必然か、幸か不幸か、世界を司る創造神の元へ流れ着いた。

これは、そんな彼の非常識に満ち溢れる物語。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

……ここは一体どこなのだろうか？

何もなく、真っ白の様でも真っ黒の様でもある不気味な空間だ。

しかもよく考えれば、感覚が全く無い。

あるはずの腕、足、頭……どれも、無い様に感じる。

もしかして、本当に無くて、この光景も見えているわけではないのだろうか。

「おや……珍しいね」

声が聞こえるような気がする。あるかないか分からない今、全てが曖昧だ。

「なんだ……？」

俺が何か喋った気がする。

「喋れるのかい？」

「しゃべ……れる……？」

喋ったような……いや、喋った！

俺は今確実に喋った！

それを認識した時、全ての感覚が戻ってきた。

見えるし、動かせる！

俺の目には確かに自分が映り、目の前には男がいた。

周りは真っ白で何も無い。

「……驚いたよ、まさか魂なのに実体化するとはね」

ファンタジー物によく出る神のように白い衣装を纏っているその男は、驚いたようにそう言う。

「なあ、ここはどこだ？」

だが俺はそれを気にせず、思ったことを口にする。

……後から思えば、放心状態だったのだろう。

「……こんなのは初めてだよ。特別に、教えようかな」

そう言うと一呼吸置き、説明し始めた。

「ここは連結空間、何もない場所だ。しかし、全ての世界はこの空間に繋がっている。

全てのために無くてはならない場所だよ。そして、創造神の僕の”仕事場”でもある」

「どういう意味だ？」

「僕の仕事は、君みたいな珍しくここに迷い込んできた魂をどうにかするのが一つ。

全ての世界を管理して、新しく創ったり消したりするのが一つだ。最も、君みたいなのはあんまりないから実質仕事は1つだけだね。」

「うーん……」

「ああ、全て理解しようとしなくていいさ。多分無理だからね。それに、もしかしたら後で理解できるかもしれないし」

意味が、よく分からない。  
掴めたのは大まかなことだけだ。

「さて、これから選択をしてもらおう。

……喋れない魂しかいなかったからちゃんと選択させるのは初めてだよ。」

「選択？」

「そうだ。……君には、2つの選択肢がある。

まず一つ、このまま本来行くべきだった場所へ行く。君たちはあの世って言ったっけ？」

もう一つ、新しく創った世界の神を務める。丁度今創ろうとしているところだよ。

正直に言えば、人手不足なんだよね。いくら世界が増えても、管理できるのは僕だけだからね」

「……創らなければいいんじゃない？」

「残念ながらそれも行かないのさ。確かに、誰かに命令されてるわけでもなければ、

強制的に創らされてるわけでもない。でも、やらなきゃいけないんだよ。” そうなってる” からね」

「……わからん」

「まあ、そんな話は置いといて。選択を頼むよ」

ぶっちゃけ、こんな選択肢出されたら選ぶの決まってると思うんだよな。

もちろん……

「その選択肢なら、俺は後者を選ぶ」

「……うん、わかった。準備を始めるから、ちょっと待っててくれ」

俺は座って待つことにする。

ところで……何故俺はこんな状況でありながら考えられるんだ？  
普通なら考えるのをやめてもおかしくない状況なのに。  
死んだから？関係ないだろう。そんなことは微塵も考えていなかった。

まあ、考えて分かるようなことでも無さそうだし……

「……よし、これで終わりだ」

向こうも終わったみたいだし。

「ああそうそう、君にはこの本を渡しておく。役に立たないことは無いと思うから。」

……それじゃあ、あそこへ行ってくれ」

「どこか？」

「そこでいい。……最後に、名前を聞いてもいいかい？」

「おつじじいじゆんじ 応条順時だ。どうせもう使わないと思うがな……」

「それじゃあ、ありがとう、おつじじい 応条順時。生憎僕には名前が無いんだけれどね。」

またいつか会えたらうれしい」

「そうかい」

そうこう言っているうちに、俺は光に包まれ始めた。

正直なところ、これからどうなるのかさっぱりわからないし、こいつの言ったこともよく分からない。

だけどもあ……

「できるだけ、楽しむとしますかね」

そう言い残し、俺は消えた。

さて……どうするかなあ。

周りは木一つ無い果てしない草原。地面が無ければ、さっきの場所とあんまり変わらないな……

そもそも、俺はどうすればいいのだろうか。  
確か世界の神とか言われた気がするが……

ん？……ふむ。

適当な場所に移動、地面を引っ張るイメージで……

「それっ！」

ドゴオン！

「うぐっ」

な、なんだ……力が入らな……

起きると、朝だった。

”今は太陽が沈んで出てきた時”と頭に浮かぶので、多分一日経ったのだろう。

しかし、昨日のはなんだったのだろうか？

本能的にと言うか、感覚でやっただけなのだが……

目の前に馬鹿でかい山が出来てるし。

うーん……ああそうだ、本。

基礎的なことぐらいは、書いてあるだろう。

能力について

この世界で能力とは、人によって持っていたり持っていなかったりする固有の物だよ。

世界の頂点に位置する君なら確実に持つてるとは思うけどね。それもすごい物を。

とりあえず、目を瞑って能力と念じればいい。名前だけは分かるから。

何が出来るか、やりたいことをイメージしつつ力を込めればいい。手なんかを使つてやるとイメージしやすいと思う。

最初のページ。こんな物もあるのか……完全にファンタジーだな。

今の俺の存在が既にファンタジーだから今更だけど。

目を瞑って……集中。

『現実と幻想を操る程度の能力』

…… 本当に名前しか分からない  
いや、待て。この感覚は、さっきのと似てるな……  
もしかして、この山も能力で創ったのか？  
…… 神っぽく何でもできる物だったりして。ただし、力は半端なく  
使うとか。

いろいろ試した結果、その通りだった。力を半端無く使うことまで  
含めて。

5つ試そうと思って7日もかかるとは思わなかった。  
とりあえず、読書しよう。もう倒れるのは嫌だ……

無事読破。ただし1日ぶつ通しで。やっぱり夜って暗いんだな。  
さて、力について確認してみよう。  
さっきまで力と言ってはきたけど結局なんだかわかってないし。

目を瞑って集中。今度は力をイメージする。

…… 白い何かと紫の何かがあるようだ。  
具体的に何とはわからないが、取りあえず二つ持っているようだ。  
これ以上のことは書いてなかった。自分で考えろと。当たり前か。

普通の腕力とかと混ぜって紛らわしいからこっちはこれから気とで  
も呼ぼうか。

正式名称を俺が決めれば早いんだが適当につけるのもいやだしな。

そういえば、俺以外に誰もいないのだろうか？  
世界の始まりだし居なくてもおかしくはないが、世界が違うからと  
いって特別に何か違うことはないらしい。  
つまり、日本神話とかが実在する可能性も無いわけではない。  
最も、神話なんぞほとんど知らないのだが……  
まあ、暇になったら何かしてみよう。

後は、取りあえず住処だな。草の床で寝るのも慣れてきたが、やっぱり何か欲しい。  
とは言っても、何もないのだが……つと、そういえば目の前に山があったな。  
穴でもぶち開けて住むか。力も人間だったときに比べて物凄い強くなってるみたいだし。

つてことで。

「そいつ！」

ドコッ！

……ふむ。確かにこれは強い。人が入れる程度の洞穴が作れるとは  
でも、よく考えたら置く物ないな。木があればいいのだが……  
しょうがない、創るか。

木を一本創りだす。何の木かは分からないが、繁殖してもらおう。  
その時間さえ耐えれば、何とかなる。その間気についていろいろや  
つてみるか。

## 第一話・世界神の誕生（後書き）

言葉にかなり悩みました……もっというんな言葉知らないと駄目で  
すね、はい。

一行書くのに10分悩むとありました。これはまずい。

## 第二話：天照大御神（前書き）

日本神話入りします。一億年ぶっ飛ばします。原作キャラ出ます。最初のはあらすじのようなものです。毎回つけるつもりは無いですが。

## 第二話：天照大御神

成り行きとはいえ世界の頂点に立つこととなった主人公。

もちろんほとんど何も無いその世界で、木を一本創りだす。

この原始の世界に、何を見る？

木を創りだしてからおよそ1000年経った。

木は20本程になった。早いのか遅いのかわからないが……

寿命が無いも同然だからだろうか。この1000年は長いようにも短いようにも感じる。

もう人じゃないなあと今更なことを考えながら、修行する。

修行とは、気と能力の修行だ。

気は使えば増える。使い方も分かってきた。

能力は使えば慣れる。ただし、気を使うので増えないと倒れるのは仕方がない。

今はまだ増やすときだろうが、もう少ししたら頭に浮かんでいる気の使い方をやってみようと思う。

……とは言つものの、ずっと同じことをやっているので暇になる。  
なので、前に言ったように誰か居ないか探しに行こう。

やはり1000年程度ではほとんど変わらない。いつの間にか山の近

くに湖が出来ていたときは驚いたが、と、歩いていたところで。

「貴方は誰？」

いつの間にか後ろに誰かいた。

「……俺は……」

応条順時と言いかけて、止める。

これは前の世界での名前だ。

「刃勇流英だ」

なので、ふつと頭に浮かんだ名前を言う。

「そう。私はアマテラス。ここ高天原を治めているのよ」

アマテラス、と言つと……

「天照大御神？」

「そうとも呼ばれてるわね。貴方は何をしにきたの？」

「探索だ。俺はあっちの方に住んでるんだが、誰も居ないからな。暇なんだ」

「そうなの。でも、ここも私以外誰もいないから暇な物よ？」

「俺としては話せただけでうれしいよ」

……ん？

「おい、誰か来るぞ？」

「……ッ、まさか」

遠くに、誰かがこちらに向かって歩いてるのが見える。

「ここを奪いにきたのかしら？だとしたら……」

「いや、待て。敵意は無さそうだぞ？」

だんだん近づいてきているが、敵意を全く感じない。

「何か構えてるわけでもないし……」

「……本当ね。治めるっていう言葉を重く感じていたのかしらね」  
そういうことで警戒をやめ、待つ。  
やがて目の前に来ると……

「あら、スサノオじゃないの」

「やあ、アマテラス。そちらの方は？」

「刃勇流英だ」

「この人はさっき来たのよ」

「そうか」

と、こっちに来て微笑みつつ。

「初めまして、僕はスサノオと言う。アマテラスとは兄妹だ。僕が弟だけだね。

もう一人、ツクヨミって言う兄が居るんだけど……どこに居るか分からないんだ」

「ああ」

全部どこかで聞いたような名前だな……まあいいか。

「さて……僕はもう行くとするかな。ここに来たのは挨拶するためだし」

「あら、遠い所にも行くのかしら？」

「しう名答。どことは言わないけどね。それじゃあ」

そう言い、スサノオは去っていった。

「さて、俺も帰ろうかな。こうして話したのは久しぶりだ」

「一気に寂しくなるわね」

「何を言うか。この時代で、何人も一緒に居る事自体が珍しいんだよ。」

「まあ、それもそうね。また会いましょう」

「ああ」

微笑むアマテラスに見送られつつ、俺は帰っていった。

ということに着いた我が家。

隅には1000年分の日記がある。

紙……というか白紙の本は、能力で創らせてもらった。修行目的にこの能力は便利すぎるのであまり利用したくないのが本音だが、本なんぞ今から何年後に出来るかわかったものじゃない、ということでは仕方なく。言い訳にしかならないが。

さて寝よう、いつの間にか日が暮れている。

能力の安定はいつのことやら。明日も明後日も、修行だな。

気がつけば1億年。果てしないと思っけていても、意外とすぐに過ぎる物だな……

もちろん変化は大量にある。

作り出した木は枯れることなく成長し続け、大木になった。

しかも、そこから広がっていった木々は森と言っても良いぐらいに広がった。

火山が噴火したりして地形に凸凹ができたし、どこからか水が出てきて川もできた。

人間どころか猿も居ないが、かなりの変化があった。

悲しいのは、相変わらず話す相手が居ないことか。

もちろん俺自身にも変化はある。

気は増加したし能力も少しは安定してきたが、

一番は『術式』を開発できたことだ。

最初にアマテラスに会った年の10年後ぐらいから開発に取り掛かっていたのだが……

なんとか完成した。あとは、修行して安定させるのみだ。

この術式は気を精密に操って式を作り、何らかの効果をもたせることができる物だ。

式なので複雑な物は相当に精密で複雑になるが、その代わり成功すれば安定する。

うまくやれば単純に気を使ってやるより消費が減るし、効率もよくなる。

もちろん難点は、難しさなのだが。

そういえばあの後分かったのだが、アマテラスが居た高天原は天界と呼ばれるところにあったらしい。

で、俺が通ってきた道は天界と地上を繋ぐ道だったらしい。

偶然にも程があるだろう……

さて、これから神社を建てようと思う。

何時までも洞穴はなんだか悲しいし、個人的に神って言うと神社だし。

100年ほど前から計画はしていたので、準備は万端だ。

場所は、湖の近くだ。とは言っても山の近くの湖ではなく、別の場所の湖だ。

理由はいろいろあるのだが……今はいい。

建設完了！特に何も起こらなかったなので過程は割愛する。

本殿から鳥居まで建てておいた。人がいない今意味はないけど。朽ちないように保護の術式をかけてあるので、人が出る頃までもつてくれるとありがたいのだが……

荷物は日記のみ洞穴に置いてきた。封印付きで。

ぶっちゃけ、多すぎるのだ。圧縮の術式をかけても一部屋潰す程度にはある。

止める気はないが。書かないつもりでも無意識に書く程度には慣れてしまったからな。

封印かけたのは、無くしてしまうのは惜しいからだ。

術式のテストも兼ねているが。だめなら、いずれ封印が自然消滅するか誰かに解かれるだろう。

出かけようか……と思ったが、日が暮れてきたので明日にしよう。

とまあ翌日。朝飯食ってさっさと行こうそうしよう。気になって仕方が無いのだ。

今更だが、生活自体は人間の頃とほとんど変えないで過ごしている。世界になんかあったりすると全力で取り掛かるので全然変わるが。

さて、やってきたのは山の近くの湖。神社の近くじゃない方。結構気になることがあるのだが、何となく来れないでいたのだ。気になることは、山に居てもわかるぐらいの強さの気を感じるのが一番大きい。

さて……何が出るのやら。

湖に近づいていくと、途端に何故か霧が深くなってきた。

ふむ……まあ、この程度なら見えないことも無い。

……と、なにやら人影が見えるが……

「誰か居るのか？」

呼ぶように言うと、驚いたようにビクツとした後、

「誰だ！ここはあたいの湖だよ！」

と言った。

明らかに敵意を向けられているな……

「落ち着け、俺は怪しい者じゃない。とりあえず霧を晴らしてくれ、見えない」

「見えないのは仕方ないわね……特別に晴らしてあげるわ！」

さあっと霧が晴れていき……

少女が現れた。

「妖精か……ん？妖精？」

妖精にしては、気の量が物凄く多い気がする。

その辺の森でも時々見かけるが、ここまで大きいのは見たことが無い。

「ぐっ、何と言われようがあたいは妖精よ！」

若干涙目になりつつ大声で言われた。一体何が……

「お、落ち着いてチルノちゃん？」

また何か現れた。やはり妖精のようだ。  
こちらはこちらでなかなか強いな……

状況が把握できないのだが……何があったのだろうか？

「なあ、何が……」

「ああ、すみませんその方。

チルノちゃんの前で妖精に関しての話は控えてもらえるとありがたいです……」

申し訳無さそうに頭を下げて言ってくる。

まあ、事情があるなら仕方がない。断る理由があるわけでもないしな。

「……ああ、わかった」

少し様子を伺っていると、やがてチルノと呼ばれた妖精が立ち直ったようだ。  
そして……

「お前、結局何しに来ただけ？」

「何かあるか見に来ただけだ」

「じゃああたいと勝負しなさい！」

「は？」

前後の文が繋がってない気が……

「この状況で平然としてられるってことは強いんでしょう？あたいは最強になるんだから！」

うん、わからん。妖精の括りで言えば十分最強なのだが……  
まあ、深く考えずに相手をしようか。

「わかった、いいだろう！かかってこい！」

さて、がんばろうかな……

第二話：天照大御神（後書き）

アマテラスはいつかまた出てきます。多分。  
スサノオも出てくるかも。

### 第三話：実戦経験なんてありません（前書き）

タイトル通り。先に言っておきますと、結構無理矢理に展開を引っ張りました。

### 第三話：実戦経験なんてありません

ふむ……

よく考えてみれば、俺は今武器なんぞ持つちやいない。

ついでに、力と気はあるけれども実戦経験も無いに等しい。

拳句、チルノは強い気を放っている。

あれ、負けてもおかしくないよなこれ……

チルノは氷を固めた棒……いびつだが剣か？それを構えている。

対して、俺は素手だ。

能力を使ってもいいのだが、あまり時代に合わないものは出したくない。消費も激しいし。

「いくわよー！」

そのかけ声と同時に、氷は俺の目の前まで来ていた。

……速い！

「チツ……せいつ！」

受け流しつつ、カウンターを入れる。

「ぐっ」

だが、その勢いで何回も斬りつけて来る。防ぎきるのは不可能だ。

どちらかと言うと殴られているのでスパッと切れたりしないのが幸いだ。

……打撃ならいけるか？

「……………これだっ！」

ガンッ

「あっ」

手に気を込め、氷の剣を殴って弾き飛ばした。  
この隙を逃すほど馬鹿ではない。

「今度はこっちの番だ！」

武術の心得はないので適当になってしまいが、殴る。  
回し蹴りからの回し蹴り。浮いたところに滑り込み殴り上げる。  
後は……………

「っ……………これ以上させるか！凍れ！」

ガキン！

蹴りは、突然現れた氷により防がれる。  
チルノはその隙に距離をとり、気を集めて……………

「食らえ！パーフェクトフリーズ！」

すると、チルノから弾幕が放たれる。  
そして……………弾幕が止まる。

「……………？」

「今だ！アイシクルマシンガン！」

と、弾幕が動くと同時につららが凄い速さで迫る。

「っ……なかなかきついな……」

気を集めて盾にし、ダメ押しで即席術式結界を貼る。  
弾幕は弾かれていくが、即席結界も壊れていく。

「まだ試してないけど……仕方ない」

俺は盾とは別に手に気を集め、形を形成し放つ。  
白のその弾丸は、いくつもゆっくりと進む。

「相殺弾丸！」

速度の遅いその弾丸は、チルノの弾丸やつららに当たると同時に消し去った。

「何!?!」

「終わらせるぞ！」

突破口を作り、チルノへ殴りをかます。

「ぐうっ」

「破壊の拳！」

ある程度破壊に特化した術式を拳にかけ、もう一発入れる。

「まだだよっ……………」

チルノは氷を創りだし、抵抗する。

だが、破壊に特化したこれを防ぐには力不足だった。

バキッ！

「がっ……………」

チルノは吹っ飛んでいった。おそらく、もう戦闘不能だろう。

吹っ飛んだところでは、チルノが泣いていた。さっきのもう一人の緑髪の妖精もいた。

チルノの近くにしゃがみこむ。妖精は何も言わなかった。

チルノは何か言っているが、正直なところさっぱりわからない。

「……………チルノちゃんは」

と、そこまで黙っていた妖精が口を開く。

「チルノちゃんは、群れから追い出されたんです」

「……………へ？」

「もともと私達妖精は、非力で無知です。でも、チルノちゃんはそ

のどちらもあった。

単純な思考の妖精が取る行動は簡単でした。追い出すことです。お前は妖精などではない、と、何度も……っ」

この事実にも、俺は黙っていることしか出来ない。

こんな状況で、なんて声をかけたらいいのか、俺には分からない。

やがてまた話し始めた。

追い出された彼女は、力を求めた。

それは追い出した奴らに向けるための物ではなく、単純に最強を目指すため。

なぜそう思い至ったのか分からないが、妖精として生きること捨ててまで目指そうとした。

しかし、妖精だと言い張ることは絶対に諦めなかった。彼女なりのプライドがあったのだろう。

緑髪……大妖精と言っらしい。

彼女にもチルノの行動原理と考え方はほとんど分からないが、支えになりたいということに付いていつてるようだ。

「……今更だけどさ、俺みたいな見知らぬ奴にそんな事言っちゃまっていいのか？」

「いいんですよ。ただの自己満足ですけどね。事情を知られて困ることもないですし」

ああなるほど、妖精を、群れを捨ててまで得ようとした『最強』を俺がへし折ったのか。

ならば、責任を取らなくてはな……

「なあチルノ」

「……なによ」

「俺の修行に付き合わないか？」

「……え？」

要するに、俺は不可抗力とはいえ彼女の上に乗ってしまったわけ。ならば、手伝うぐらいはしなければならぬだろう。

「まともに戦いをしたことの無い俺。でもその俺は勝ってしまった。別に俺はお前に、俺が最強だと言いに来たわけじゃないのにな」

「……やるわ」

「……ああ、わかった。いつか俺を、超えて見せてくれ」

チルノは俺の修行に付き合うの決定。  
後は……

「大妖精、お前はどつするんだ？」

「ついていくに決まってるじゃないですか。私はチルノちゃんを支え続けるって決めたんですから」

「……ああ、そうだ。ここを離れられるのか？妖精は離れられないと聞いたが……」

「私達を縛るものは、持った力で消えました。ですので、どこへでもいけます」

「なるほどな……じゃあ最後に、お前達は、妖精でいたいかな？」

「もちろん」

「じゃあ、ちょっと待っててな」

根本的にいろいろするのは俺じゃ力不足だ。だが、力を抑えることぐらいはできる。

2つのリボンに、複雑に術式を書き込んでいく。こういう時は能力に感謝したくなるな……

「……よしできた。頭にこれをつけな」

素直に、付け始める。チルノには青いリボン、大妖精には黄色いリボンを渡した。

と、みるみる力が抑えられて減っていく。

「俺の力じゃこの程度しか出来ないけどな……力ぐらいは、妖精になれてるんじゃないかな？」

「ありがとう！……でもこれじゃあ最強を目指せないよ？」

「外せばいい。でも、基本的につけていれば、少なくとも妖精に見えるさ。若干身長も縮んでるぞ？」

「え？……あ、たしかにあんたが大きく見える」

「まあ、それじゃあ家に帰るとしよう……っと、忘れてた」

自己紹介をしていない。

「俺は刃勇流英、ただの神だよ」

「いやしかし疲れたな……」

3人で家に帰ってきた。話し相手がいるってこんなに素晴らしいことなんだなと思ったりもした。

「おい、部屋は有り余ってるから好きな部屋使っていいぞー」

畳の上で転がりまわってる2人に声をかける。

建設の時、必要な場所以外は全て空き部屋にしたので有り余っているのだ。

何部屋か日記の保管場所にして潰しているが、それでも5部屋以上はある。

ここは宿か。神社だよ。

翌日。あの後、もう暗かったので寝た。木炭に術式をかけて、それに火をつけたものぐらしか光源がない。

ろうそくでもあるといいんだが……まあ、それはどうでもいい。

それより朝食だ。もちろん俺が作る。

「なにやってるの〜?」

と、おいに誘われたのかチルノが来る。

「朝食作ってるんだ。大妖精はどうした？」

「いろんな場所見て回ってたよ」

「そうか。まあ、そのうち来るだろう。……っと、もうそろそろで  
きるぞ」

献立はご飯に焼き魚、味噌汁だ。

味噌だけ自分で出したが、それ以外は全て自分で取ってきた物だ。

全部今の物だけでやるうとするとなだだでさえ単調なのが余計にひど  
くなる。

許してほしい。

木を削って作ったちやぶ台に配膳し終えた頃、大妖精が釣られたよ  
うにやってきた。

「……あ、そういえばお前達箸なんて知らないか」

と、ここで重大なことに気がつく。今更である。

何とか教え、こんどこそ……

「「「いただきます」」」

### 第三話：実戦経験なんてありません（後書き）

チルノの理由が全然思いつかず、散々悩んだ挙句こんな出来に。  
いつかいいのが思いつけば、編集しようと思います。

取りあえず今は最後のあたりがやりたかっただけと思ってください。

#### 第四話：修行の日々（前書き）

今回は最初に、あらすじでもありますが、流英の日記を書いています。

5kbだったので、ちょっと短めだと思います。微妙に書き方を変えたせいもあるか……？

後、書き終わった後に全員容姿について触れてないなと思いました。いつか番外編で出します。

#### 第四話：修行の日々

まともな生物が居なかったこの世界で、俺はチルノ達に出会う。

そこでは、強すぎる力は時に己をも滅ぼすことを観た。

俺はそんな彼女達に手を差し伸べた。しかしそれはやっていいことだったのか？

世界の頂点に立つものとして考えて、だが。

とはいうものの、俺には世界の頂点が何なのか分からない。

全ての出来事の原因を負うべき存在？何も気にせず気ままに突っ走る存在？

……まあ、悩んで分かる物でもないか。

某日の日記

より

「こつだ」

草地に座り、朝日に長い銀髪を光らせる男が居る。

「……こつだ？」

その男を向いて座る、青い髪に青いリボンをつけた少女が一人。

「大体そんな感じだ、もう少しやればできるかな。一旦終わるぞ」

……まあ、ご存知流英とチルノだ。

俺達は今、修行をやっていた。

とは言うものの、俺には戦闘技術がないので教えるのは術式だが。

「あー疲れたあ……………」

「まあ仕方ない、最初はそんなもんだ。コントロールできないうちは気を垂れ流してるとようなものだしな。

さて、飯作り始めるから俺は行くぞ」

自慢するつもりはないが、今までずっと飯を作り続けてきたので大分うまくなってると思う。

ある意味不可抗力。嬉しいやら悲しいやら。

厨房に着く。とは言ってもかまどと台がある非常に簡素な部屋だ。包丁ぐらいは欲しかったのだが、さすがにもう記憶が薄れてきていたので駄目だった。

イメージが大事なこの能力、名前だけ覚えていても役に立たないのだ。

「さて、今日はどうしようかなと……………」

「「「じちそうさまでした」「」

さて、朝食も食い終わったし、どうしようかな……

「あの、流英さん」

「ん？」

「いろんな部屋に、たくさん本があるんですけど……読んでもいいですか？」

ふむ、読みたいときたか。

別に日記程度読まれても問題はないのだが……

「別に構わん……が、大妖精って、字読めたっけ？」

「……字？」

そうきたか畜生。

仕方ない、全部教えるでしょう。

時代を先取りしてるけどこの程度許して欲しい。

……誰に言ってるんだ俺は？

とりあえずひらがなは全部教えておいた。覚えてるかは別として。

こりゃ、チルノの修行と並列してやるしかないかな。

……とは言うものの。

「あー、昼のこの時間は暇だなあ」

昼になると逆にやる事が無くなる。  
チルノやる気あるかな……

「おい、チルノ」

「なにー?」

取りあえず呼ぶ。

「修行やる気ある?」

「やる!」

やる気と喜びに満ち溢れた笑顔を向けられる。

やばい、眩しすぎる……ってそれはどうでもいい。

「……聞いたいてあれだけど無理するなよ?」

「大丈夫よ!あたいは最強に近づくならどんな努力も惜しまないわ  
!」

本当に惜しまなそうだ。誰かにそそのかされたらあっさりついて  
いきそうなぐらい。

……っておい、何を言うか俺は親じゃない。え?保護者?……う  
がー!

「……大丈夫?」

俺は心配されるほどの顔をしていたか。

「……スマン」

取りあえず謝っておく。さて、気を取り直して修行と行くこう。

「ふっ」

硬い木を削って作った剣を振る。

剣と言っても、具体的な形は忘れたので適当だ。

たかが木、されど木。切れ味は悪くない。

むしろ、下手に石を削った物より軽くていいと思う。

……いや身体能力的にどっちもほとんど変わらないけど。なんて無駄な力。

「うーん……」

チルノの方は、基礎を極めさせるために一人で練習させている。

数学も似たような物だった気がするが、基礎が超大事。ぶっちゃけ後は応用で何とかなる。

基礎がわかるのではなく、究極を目指してもらおう。無論俺も極めちゃいないが。

という感じでやっていたが、折角二人できたのに個別と言うのは意味がないので……

「チルノ、どうだ？」

「この式のここが複雑で分からないのよ……」

困惑した顔をこちらに向けつつ、指し示す。

「あー、それは別のやり方があるんだ。ここをな……」

こうして、昼は過ぎていく。

日が暮れた頃、神社に着いた。

「ただいま、大妖精いるか？」

「ここにいます。それより、さっき向こうの森に何か居ましたよ？」

「ん、そうか、珍しい。明日見に行くでしょう。さて、寝るぞー」

明かりは松明しかない暗い中、俺達は寝る用意をする。  
もう少し高度な物が出てくれば活動できるんだがな……

特に言うこともなく翌日。修行、朝食。

今日は、昨日の通り森の様子を見に行く。

まともに生物が居ない今、何か居ると言うだけでも結構珍しいことなのだ。

「お前達、来るか？」

「もちろん」

「そうか。じゃあ、行くぜ」

鬼が出るか蛇が出るか。行くとする。

入り口到着。

「うーん、やっぱり相変わらず大きい森だ。自分で創ったとはいえここまで広がるとは……」

「え！？ この森って流英さんが作ったんですか!？」

「まあ似たようなもんだ。勝手に育ったって言うのが正しいが」

「ほへへ」

驚いてるのか感動しているのかよくわからない顔をしている。いや感動されても困るんですが。

「……行くぞ?」

「……おや、あれかな?」

遠くに、動く影が見える。人型をしているが……

「取りあえずそっと近づくぞ。いいな?」

「」「はい」

接近することが出来た。容姿は……長い金髪、黒い服だ。瞳は赤いように見える。

「そこに居るのはどちら様？」

「ひっ!?!」

こちらを向いて全力で怯えている。なんか悲しくなってきたんだが……

「……一応喋れるのか？」

「あ……喋ってる……」

話が合わない。どういう意味だ。喋って悪いかと、ふざけ半分で聞いていたのだが……  
次の言葉に凍りつくこととなる。

「人間なの……?」

#### 第四話：修行の日々（後書き）

次回、原作キャラ登場。

とは言うものの、簡単ですよね。

今回は何となく速く書けた気がします。ペースが維持できればいいんですがね……

## 第五話：増える居候（前書き）

居候一名追加！

後、全体的に時間の流れが速いのは仕様です。取りあえず、人間を出したい……

## 第五話：増える居候

「人間なの……?」

「……」

人間?人間だと?

「ど、どうしたの?流英?」

「っ……いや、大丈夫だ」

チルノの一言で、我に返る。

「私何か変な事言ったかしら……?」

「いろんな意味で問題ありすぎるよ……なあ、一つ聞きたいんだが……  
白い衣装を纏った男、と言って思い当たる奴はいるか?」

「ええ、知ってるわよ?なんか何もないところで……」

「わかった、もういい。いろいろ言いたいけどそれは後だ。ついて来い」

「……? 分かったわ」

と言うことで、悩んでいるチルノと大妖精も引き連れて帰ることにする。

どつするべきか……

到着。昼過ぎだ。

「チルノと大妖精は遊んでてくれ。  
ちよつと聞きたいことがあるんだが……」

「何？」

「ここがどこだか分かるか？ 後、自分のこと」

「うーん……私、気がついたら何も無い変なところにいたのよ。  
で、なんか変な男が来て……」

要約すると、

連結空間に飛ばされた。創造神が見えると言つことは俺と同じく  
珍しいのだろう。

で、珍しい繋がりかわからないけどここに送られたと。

『一度起こると何度もあるんだね』とか『二度あることは三度あ  
る……だっけ？』とか  
考え方によっては不吉な言葉も出てきたが。

彼女自身は、ルーミアと言つらしい。前の世界の記憶が中途半端  
になっているらしく、

名前を忘れていたらしい。ルーミアはその場で思いついた名前だ  
そうだ。

ついでに、妖怪らしい。今の時代、まともな形をしてる妖怪なん  
て珍しい。

「……はあ。それじゃあ、俺からはここの説明をするとしてよ」  
「今度は、こちらから説明。  
この世界について、俺も転生してきたこと、俺についてなど。  
何となく、神なのは伏せておく。」

「……信じがたいわね」

「前の世界がどうだったかなんて忘れたけど……確か、こんな事は出来なかったはずだ」

と言って、気を使って火をつけてみたりする。

「わあ、すごい！ 確かに、こんなことはマジックとかじゃなきゃ無いわね」

「マジックか。聞き覚えはあるけど、もうどんなだかは忘れたな。  
さて、それよりだ。この世界で暮らすからには、いろいろ身に付けてもらわなきゃな」

修行三人目。暇だからいいけど。

さて、適当に教えたところで……  
暇になる。やることが重なる事もあるが逆に言えば暇が重なる事もある。  
暇つぶしに術式組むかー、と思……

「……そういえば」

『気』に具体的な名前をつけていないのを思いだす。

今のところ気の種類は三個知っている。

一つは大概の事は出来るが弱い物。

一つは攻撃的で強い物。

一つは自然から出来る物。

最初の二つは持っているので分かるが、最後は持っていないのでよく分からない。

取りあえず、妖精が持っているのは分かるが、自然が実体化したようなものだからだろう。

真ん中のはすぐに思いついた。妖怪が持つから妖力。

最後のも思いついた。妖精からとって妖力だと被るし、自然力と言ったら語呂が悪い。

何となく魔法使いが使うような印象も受けたので、消去法で魔力とした。

問題は最初。今のところ俺と極一部の生物しか持って居ないようなので、何ともいえない。

……これが『気』でいいか。区別できればいい訳だし。何か思いつけばそう変えればいい。

そういえばもう一つ。今さっき特徴を挙げたけど、片方だけ使ったことが無いな。

ちょっとやってみようか……

日が暮れてきた頃。

「……無理だな」

現時点では不可能なことが発覚した。

同時に出すなら問題はないのだが……

気のみにも命令を送ろうとすると妖力にも命令が行ってしまうといった感じだ。

長い間混ぜて使っていたせい、完全に混ぜられているのが一番大きい。

……前に飛ぼうと思って飛べなかったのもこのせい。確かに妖力の性質上単純な飛行には使えない。

妖怪なら別なのだろうが……俺は妖怪じゃない。結構器用貧乏なんだな……

何でも出来るって、難しい。

帰宅。これは、意外とまずいことかもしれないと思いつつ。

ただの力馬鹿なら別だ。しかし、俺はそんなに気やらがある訳ではない。

少なからず技術が必要になる俺にはきつい物がある。

ということ、寝ることにした。

別に気が狂ったわけではない。

この解決方法は、俺には一つしか思い浮かばなかったからだ。

それは、精密に一つ一つの気と妖力に命令を出し、完全に分離させる事。

難易度としては……何か物質があるとする。それを原子ごとに分けてながら分解する感じだろうか。

起きてやれば発狂物だ。そして時間がかかりすぎる。

それを、寝ている時……つまり、完全に自分に集中できる時にやっつて少しでも効率を上げようと言う事だ。

……が、そうは言っても何年かかるかまるで分からない。予想だ

が億単位でかかってもおかしくないと思う。

唯一の不安は、俺自身は問題ないのだが、あの三人にここをまかせつきりで大丈夫だろうかということ。

大体の物に特定の事しか出来ないよう術式はかけてある。家事自体は大妖精が意外とできる。

問題は修行だ。三人には教えることが結構ある。力はともかく知識としては経験が結構あるからな。

「うーん……」

「どうしました？」

と、大妖精。

「いや、長い間家を空けたいんだけどね……お前達の修行をどうするかと思ってね」

「ええっ！？ 何故いきなり！？ どこに行くんですか？」

そこまで驚くかい。いや確かにあんまり自発的な行動はしなかったけど。

「別にここが飽きたとかそう言うわけじゃないから安心しろ。後、空けるってそっちじゃなくて……まあ単刀直入に言えば寝る。だから一応はここにいる。理由としてはちょっと俺自身に問題があるから」

「そうなんですか……修行についてはチルノちゃんと相談したほうが言います。」

一番修行らしい修行を受けているので……」

修行らしくなくて悪かったな、とは言わない。  
だって字の読みと常識の学びだし。仕方ない。

「それもそうだな……ちょっと行ってくる」

「えええっ！？ あたい何か悪い事したかな？ あ、そういえばこの前お皿が欠けちゃったような……」

「ああ、この前のつてチルノだったんだ……別に愛想をつかせて出て行く訳じゃないよ。ちよっとね……」

大妖精にしたような説明をする。

「しゅ、修行はどうなるの？」

「それを相談しに来たんだ。いろいろ本に書いて渡すぐらいなら出来るが……」

「……流英の事情だもん、仕方ないよね。あたいはそれでもいいわ。ただ……起きたら、ずっと付き合ってもらおうよ！」

「分かってるよ。じゃあ、飯にするとしよっ」

「「「「いただきます」」」」

「流英って、料理上手いのね。昼ご飯の時も言ったけど」

「長い間生きれば、自然とこうなるさ。最も、俺自身は上手いと思わないがね」

「謙虚ねえ。プロの料理人並みに美味しいわよ」

「プロ？」「」

「あれ、流英まで……まあ、すごいってことよ」

そんな会話で時間は過ぎていき……

俺の部屋に入る。後ろには、チルノと大妖精が付いてきていた。ルーミアがいないのは、まあ仕方あるまい。会って一日経ってないし。

「……さて、次に会えるのは何年後かね」

ぼそつと呟く。

「早く帰ってきてよ」

「努力する。それじゃあ、結界を貼るから、ちよつと離れてな」

この結界は、外部からの刺激やらを完全に遮断するための物だ。必要な精密さのための集中を保つには、このぐらいやらないとだ

めだ。

「あの……起きてくださいね」

「……別に死に行くわけじゃないんだけどね」

心配そうな顔で言う大妖精に、苦笑いをして返す。

「さて……よっと」

結界の準備が整う。

「また会おう。おやすみ」

「「おやすみ！」」

別にどこかに行くわけじゃ無い。この挨拶ができれば十分だ。

退屈。この頃思うのはそればかり。

流英が寝てからと言うもの、虚無感を時々感じる。

あたいはそこまで依存していたのかな？

実際に流英といたのは100年かそこらなのに。

ちなみに、今は寝てから5000年ほど経った。

もらった本は大ちゃんに手伝ってもらいつつ読み終わっている。

「大丈夫？ チルノちゃん」

「……うん。修行でも、しようか」

最近は大ちゃんとルーミアと修行をして退屈を凌いでいる。

大ちゃんはある程度術式が使えるようになって、あたいは字がある程度読めるようになった。

ルーミアは、持っている力が違うせいか上手く教えられなかった。字は、既に読めたみたいだけど。

はやく、起きないかなあ……でも、時々様子を見るけどまだまだかかりそうなんだよね……

**第五話：増える居候（後書き）**

次で起こすか次の次で起こすか考え中。

第六話：眠る世界神 - 前編 (前書き)

流英、寝ます。前後編に分かれることになりました。

## 第六話：眠る世界神 - 前編

流英が寝てから、六千二百万年ほど経った頃。

チルノはある程度気力を取り戻していた。それは持ち前の元気が  
らか、もしくは決心からか、はたまたある種の諦めからかもしれな  
い。

しかし特に娯楽など無いこの時代、出来る事といえば修行か会話  
ぐらいしかないので取り戻したところでやる事は変わらない。

まあ逆を言えば、年月が過ぎる＝強くなるが成り立ちやすくなる  
訳だが。

何が言いたいかと言えばもちろん、三人とも強くなったと言うこ  
とだ。

三人はそれぞれ上手いことが違うので教えあったりしているのも  
ある。

チルノは主に戦闘技術、教えを受けた術式だ。自分なりの改造を  
加えている事も多く、偶によく分からないことを教えたりするが……

大妖精は主に家事と言語。後、実は軽くだが魔力を使った行動も  
出来たりする。魔力に溢れた場所限定だが、瞬間移動も出来たりす  
る。

ルーミアは大体が説明を受ける側だ。しかし、元の世界の言葉や  
らを教えたりすることもある。そうそう使わないので無駄だが。

結果、三人とも大体のことなら出来るようになった。無駄になる  
ことも多いが。

「……………んう……………」

寝起きの目にはきつい太陽の光が入り込んでくる中、布団から顔を出したのはチルノ。

寝巻きなんてないので、下着姿のチルノは冷たい木の廊下を歩いて神社の外へ出る。途中、普段着を取りに行ったりしながら。

そのまま神社の近くにある広い草原まで来る。自然のまま放置されている草に光が当たり、眩しい。

多少周りを確認してから、自分の能力である『冷気を操る程度の能力』によって氷の剣を作り出す。

ここに居候し始めてから、流英の指導も受けつつ練習した結果、かなりまともな形の剣を作り出せるようになった。

ついでに、かなり硬い。さすがに術式でコーティングされた流英の木の剣ほどではないが。

まあもちろん氷は氷、太陽の熱には耐えられないので、修行が終わったら手がびしょ濡れになってたりする。

「ふっ、はっ」

それなりに長くて重いその剣を、まるで踊るかのように華麗に振り回すチルノ。

だがしかし、それをチルノは喜べない。流英に見せなければいけないと、もはや本人にすら謎の執念があるからだ。

無表情、だかしかしどこか寂しそうなチルノの様子が、それを物語る。

大分日が昇ってきた頃。既に朝食は取り、今度は三人で術式の練習をすることにする。

とは言うものの、ルーミアは自分で習得してもらえないので

実質二人なのだが。

チルノも大妖精も、魔力の精密操作はお手の物だ。後は練習か、自分で応用して新しく式を作り、できることを増やす程度しかすることが無い。

ルーミアは、大分苦戦していた。攻撃的、例えるならば落ち着きの無い妖力は、精密操作に向かないのだ。

それでも一応、基本的な式はできるようになっているあたり凄いなと思うが。

「……！　ねえ、大ちゃん、ちょっと試したいことがあるんだけど」「あー、ごめんね、ルーミアちゃんに手伝ってもらって？　ちょっと集中したいから……」

大妖精は申し訳無さそうに、けれど式から目を離さずに言った。ということでチルノはルーミアにも同じ様に頼む。

「ん、別にいいけど、代わりに私のも手伝ってくれないかしら？」「分かったわ」

とまあ、こんな感じで時間は過ぎていき……

やがて夜になる。妖精、妖怪なので何も見えないわけではないが、それでも暗い。

もともとこの世界に居たチルノや大妖精はともかくとして、もともと別世界に居たルーミアとしては複雑だった。

まあもちろん、やることもないのでそのまま寝る。

そんな生活を続けていた。

確か流英が寝てから一億三千万年ぐらい経ったと思う。そんなあの日の事だった。

珍しく三人で散歩に行くことになった。前回に行ったのは何時だったっけ？二百万年ぐらい前だと思う。

と、まあそんなに経てば大分変わるわけで。あたいたちは、前は見えなかったものをたくさん見ることができた。

一番大きかったのは、妖怪が居たこと。ただ、ルーミアみたいに喋れないみたいだけど。

……と思っていた。

「これからよろしく頼む」

でも、何故かこうなった。

事の始まりは、山に立ち入った時だ。

そこでは、ルーミアのような気を放つ生き物が数多く存在した。と、不意に大きな力を感じた。

「っ、危ない！」

ルーミアが大妖精の前に出る。ルーミアは、攻撃を受け止めていた。

そいつは、あたいたちみたいな形の妖怪で、受け止められたことに驚いていた。

「誰だ！」

あたいは思わず叫ぶ。

「それはこつちが言う事だ。他人の住処に勝手に入ってきたくせに」  
が、そんなことを言われてしまう。

「……え？」

しかし、あたいは別のことで驚いた。

「喋った……？」

「そつちから話しかけておいて、それはひどくないかい？」

さっきのは、反射的に言ってしまったただけだ。まともな返答が来るとは……

「ともあれ、戦つのなら名乗っておこうかしら。あたいはチルノ」

「……へ？ あ、えっと、大妖精です……」

「ルーミアだよ」

「……まあいい。ならば俺も名乗ろう。この辺一帯の妖怪を纏め上げてる、義鋼天翼だ。」

沈黙。短くも長くも感じた。妖怪を纏め上げることに驚いたせいもある。

「……いくよ！」

「いくぞ！」

言った瞬間、氷の剣と拳がぶつかり合った。

ちなみに、大妖精とルーミアは……

「……あんなに本気でやってるところに割り込む隙なんてないよね……」  
「ですね……まあ、現状一番強いのはチルノちゃんだし、いいとは思いますがね」

離れたところからのほほんとしてたりする。

第六話・眠る世界神 - 前編 (後書き)

もう少し、早く書きたい……

今回は、結構短いです。その代わりの前後編ですが。

オリキャラ登場。その名も義鋼天翼。

どうなることやら。

第七話：眠る世界神 - 後編 (前書き)

初っ端から戦闘です。

戦闘シーンは苦手なので、うまく書けてるように祈るしかありません

……

## 第七話：眠る世界神 - 後編

ガキン！  
ガキン！

氷と拳から出てるとは思えないような音が鳴り響き続ける。  
その力のぶつかり合いは、他の誰も割り込むことを許さない空間を作り出していた。

「なかなか、っ、やるね！」  
「そつち、こそー！」

純粹な力のぶつかり合い。衝撃で周りの木が揺れるほど強い。  
が、力はほぼ互角で、やり続けても意味のないことだとは両者ともわかってる。

「じゃあっ、次はこつちよ！」

一瞬の隙を見計らってチルノは距離をとる。  
そして放つは弾幕の嵐。

「いいだろう！　だがそれはやるべきじゃなかったな！」  
「っ！」

が、天翼は猛スピードで弾と弾の間を通り、一瞬でチルノに一撃を加える。

相手は鳥、地上とはいえ速い筈だ。  
しかし、追撃を入れることは叶わない。

「即席結界！」

それに、拳はあえなく弾かれる。

ここまでのやり取りでもういいだろうと考えた両者は。

「「そろそろ本気でいくぞ（わよ）！」」

妖力、魔力を開放して戦う。今ここに下手に飛び込めば、一瞬のうちには消滅するほどの力が広がっている。

そんな中、更に激しく攻防は続く。どちらにも疲れは見え、戦いを楽しんでいるように見える。

「そこっ！」

チルノは大きな氷を作りだす。それは今で言うハンマーだ。

「グレートクラッシュャー！」

出来たと同時に振り下ろす。それまでの時間は極短く、到底対応できる速さではない。

ドガン！

速さ、重さ、力で極限まで強い力を持ったそれは地面にたたきつけられ、鼓膜が破れそうなまでの音を立てる。

しかし、天翼は立っていた。血みどろの姿で。

見るだけでも痛々しいその姿になっても立ち続けるのは、妖怪を纏め上げる『頂点』としての誇りだろうか。

1秒、1秒。チルノには、反応を待つその時間が非常に長く感じられた。

「はあ、はあ……っ、お前なら、いい、かもな……」

やがて、そんなことを言いつつグラッと大きく揺れる。すかさずチルノは抱きかかえる。

さっきまでの誇りを、散らせたくなかったという、なんともいえない思いでやったことだった。

やがて目を覚ました天翼。さすがに頭領を連れて帰るわけには行かないので場所は変えていない。

そして、その顔をチルノは心配そうに覗き込む。

さっきまでの敵意なんてなかったのかのようなその純粋な表情に天翼は驚いた。

「……何故……っ」

「あんまり動かないほうがいいよ」

寝ていた天翼は聞きつつ起き上がろうとした。

が、全身に激痛が走ったのでそれは叶わなかった。

「ちょっとあたいやりすぎちゃったみたいでね……ごめんね」

「……俺は敵だったんだぞ？ なぜ助ける？」

「別にいいじゃん。流英だって特別な理由がなかったら殺しなんてしなかった」

「その流英とやらを俺は知らないが、随分と甘いんだな」

そこでチルノは一息おいて、自慢げに胸を張り。

「それが流英だからね！」

「……そうか。まあ、それはどうでもいいが。ところで……」

お前、俺に代わって妖怪を纏める気は無いか？」

「……へ？」

受け流されたのはともかくとして、妖怪を纏めないかということに驚き、思わず変な声を上げるチルノ。

「頂点は、常に力の強い者が立つ場所だと俺達は思っている。

そして、俺は負けた。お前にここを譲らない訳には行かない」

「……えっ」

思考停止しかけているチルノ。その間にも話は勝手に進んで行く。

「俺達は基本的にここに散り散りになって住んでいる。が、何かあったときのために集まる場所があるんだ。さあ、行こう」

「……はっ！ って、え？」

自我を取り戻したときには時既に遅し。天翼に引きずられていくチルノ。怪我は妖怪の再生力でいつの間にか治っているようだ。

冒頭（前話）へ戻る。

ちなみに、大妖精とルーミアは相変わらずの場所で座っていた。

「終わったねー」

「チルノちゃん勝って良かった！」

「うん。付いて行く……」

「かつこよかったなあ……」

「……置いてつていいかなあ……」

そして、茶番をやっていた。なにやってんの、とは言われぬ。誰も居ないから。

閉ざされた扉の向こう側。

そこには幾重にも重ねられた結界の壁。

いかなる者の侵入も許さぬその中心には、永い時を眠る者有り。そして今、その者は目覚めようとしていた。

「んー……ああ、よく寝た」

起きたのは銀の髪を持つ男。一億三千万年経っても変わらないその姿は、今で言えば16歳ぐらいの人間の少年。

しかし、その体の内に秘める力は澄んでおり、そして何より強大だ。

「気分がいいな」

かつて混沌としていた力が澄んだ結果、気分までいい物となる。……が。

「でも……ちょっと、足が……」

1億年以上動かずに寝ていたのだ。筋肉が動かないとか言うわけで

はないが、歩き方を忘れてしまった。

「まあ、すぐに慣れるだろ」

そう言っただけで覚束ない足取りで結界を解除しつつ、扉へ向かう。  
やがてたどり着き、開ける。

ギギッ……

「ぐっ、眩しい！」

……もちろん、目も光に慣れてはいない。  
窓から差し込む光に、尻餅をつく。

「……ん？」

遠くの方に、四人誰か居るようだ。

三人は分かる。だがあと一人は……誰だ？

……そうだな、この際誰でもいいから、殴ってやろう。何となくそんな気分だ。

「……っ！ 構えて！」  
「ぐっ！」

それさえ言い終わらないうちに、天翼は空を舞っていた。自分で飛んだわけではない。飛ばされたのだ。

「今の感じ……流、英？」  
「その通りだ……遅くなってすまない。おはよう、チルノ」

チルノは顔を俯ける。そして手を握り締めたと思えば……

「遅い！」  
「ぐおっ」

きれいな曲線を描き、天翼程ではないものの吹っ飛ぶ。着地が成功する訳もなく、倒れたままの流英の元にチルノが歩いてくる。

顔は俯けたままで、目から透明な滴がぽたぽたと落ちていつている。そして流英の元にたどり着くと、すんと膝をつく。

「……おはよう、流英」  
「……ああ。待たせて悪かった」

「ええ、えっと、どうしよう……」

流英とチルノちゃんは今こうで話してるし、ルーミアちゃんは天翼に説明してるみたいだし……  
仲間はそれと云うか何と云うか。何となく悲しい……

「……先に帰ろう、そうしよう」

他の四人が、これに気がつくのは随分後になる。

まあ、全員先に帰ったんだと当たりをつけたので特に騒ぎにはならなかった。

## 第七話：眠る世界神 - 後編（後書き）

起きました。次回は登場人物について+今までの補足になると思います。

戦闘シーンについて何かアドバイスがあれば、下さると泣いて喜びます。

**番外編：説明と補足（前書き）**

番外編とは言うものの実のところただの説明。  
読み飛ばしても問題は無い……はず。

## 番外編：説明と補足

流英

名前：刃勇はゆつ 流英りゅうえい

性別：男

年齢：二億三千万年歳ぐらい

種族：世界神

能力：現実と幻想を操る程度の能力

詳細：

世界の始まりから存在する世界神。

元は別の世界の人間であり、可もなく不可もない平均的な人間だった。

能力は、単純に言うとも何でも出来るが何も出来ないというもの。何かに特化しているということがないので、何かを簡単にやれたりしないのだ。

無論、完璧に使えるならば本当に何でも出来るが……

気、妖力を持つ。元は混ぜて使っていた影響で区別がなかったのだが、分離作業を行ったことにより分けて使用できるようになった。純粋な身体能力は山をぶち抜けるぐらいあるのだが、本人が気がついていないためあまり高く見えない。

比較的温厚な性格で、平和主義である。

とは言うものの、決して戦闘は嫌いではない。

来る者拒まず、去る者追わずの精神。特別な事情が無ければ仲間にするし、相手が嫌だと言えはそれで終わる。

もちろん、仲間から去ると言われても断らない。が、性格やらの要因で信頼が厚く、寝返られることはまず無いと思われる。

そんなかんじで結構自由奔放なので、本人もふらふらと勝手にどっかいたりする。

容姿は銀色のロングヘアに銀の瞳……なのだが、普段は茶色短髪に黒い瞳だったりする。こうすると力が抑えやすいのが一番大きい。

服装は明るい茶色で、一部に白がある。現代ならば高校生で通るレベルの身長だったりもする。

チルノ

名前：チルノ

性別：女

年齢：二億歳ぐらい

種族：氷の妖精

能力：冷気を操る程度の能力

詳細：

生まれつき大きな力を持ち、群れから追い出された氷精。

能力はその名の通り冷気を操り、自分の周りの気温を調節したり、水蒸気を一瞬で凍らせて武器にしたりする。

魔力を持つ。妖精の枠から外れるほど大きい。流英からもらったリボンで力が妖精並みになっている……はずだったのだが。（後述）  
純粋な身体能力は殴ると木が吹っ飛ぶぐらい。この力をうまく剣などに使っているため、流英と張り合おうと思えば張り合える。

性格は子供っぽい。が、決して頭は悪くない。

戦いを挑まれば絶対に受けるぐらいには戦闘が好き。

本人は最強を目指している。もっとも、今の時代では流英以外に彼女より強い奴はそうそう居ないので表に出ることは減った。

容姿は水色のセミショートヘアに青い瞳。後頭部には、青いリボンが結んである。

白いシャツに青いワンピースを着ていて、胸には赤いリボン、背中には氷の羽がある。身長は現代でいう中学生ぐらい。

## 大妖精

名前：大妖精

性別：女

年齢：二億歳ぐらい

種族：大妖精

能力：持っていない

詳細：

チルノと同じ様に大きい力を持ち、群れから追い出された大妖精。

種族から分かるように、実際には名前を持っていない。能力は無い。が、魔力を比較的丁寧に使える。純粋な身体能力は妖精より少し強い程度。魔力でうまくやると強くなったりはするが。

おとなしい性格。妖精とは思えないほど頭がいい。基本は家事などをこなしていて、戦闘は大の苦手。が、チルノのためとなると頑張りだす一面もある。目指す物は無い。ただ、チルノを支えたい一心だ。

容姿は明るい黄緑色のセミロングヘアーに同じく明るい黄緑色の瞳。左側に、流英の黄色いリボンでサイドポニーテールがしてある。白いシャツに水色のワンピースを着ていて、胸には黄色いリボン、背中には半透明の大きな羽がある。身長はチルノより少し高いぐらい。

言葉だけだとチルノとあまり変わらなく聞こえるが、纏っている雰囲気が違うので分かりやすい。

## ルーミア

名前：ルーミア

性別：女

年齢：一億三千万年歳ぐらい

種族：妖怪

能力：闇を操る程度の能力（現在自覚なし）

詳細：

流英のように創造神に転生させられた元人間。

記憶はぼつちり引き継いでいる。今も結構覚えている。

種族は妖怪だが、人間の畏れで生きる者ではない。そもそも人間は居ない。

能力はあるのだが、本人は自覚していない。偶に暴発したりしているが。

もちろん妖力を持つ。が、今だ扱いに慣れていない。持つ量としては多いのだが。

純粋な身体能力は、これまた本人が使いこなせていないので平凡。

チルノと大妖精の影が濃すぎて目立ちにくくなっているが、結構自由奔放な性格。

ある時は草原をふよふよ飛んでいたりと、ある時は草原で一人で修行してたりする。

目指す物も何も無い。気軽に、どう生きていこうぐらいしか考えていないからだ。

容姿は金色のロングヘアと赤い瞳。

白いシャツに黒いワンピースを着ている。胸には赤いリボンがある。身長は流英とチルノの間ぐらい。

天翼

名前：義鋼ぎこう 天翼てんよく

性別：男

年齢：一万年ぐらい

種族：鳥妖怪

能力：持っていない

詳細：

とある山一帯の妖怪を纏め上げていた鳥妖怪。

5人の中では最年少。赤ちゃんレベル。いや他が高すぎるだけなんです。

鳥妖怪だが、ルーミアと同じ様に畏れで生きているわけではない。普段は邪魔なので隠しているが、本当は大きな灰色の翼を持っている。

能力は無い。実のところ持つてるほうが珍しい。

やっぱり妖力を持つ。ただし、年月の関係でルーミアより少ない使いこなせているのでどっこいどっこいだ。

純粋な身体能力は高い。地上でも早いのだが、やはり空中でこそ本当の速さになる。

武器は拳。尋常じゃなく硬いので、下手に攻撃すればこっちのほうに痛くなる。

義理を重んじる。負ければ素直に認め褒め称える。助けられれば感謝する。チルノの時は予想外だっただけ。

ただし、少々好き勝手なところもある。悪意が無い分たちが悪い。自分より弱ければ自分が責任を持ち、自分より強ければ相手に仕える。個人としての目標は特に無い。

容姿は灰色のショートヘア、緑の瞳。

白いズボンに灰色のシャツ、青い上着を着ている。相性上接近戦闘が多いので、かなり頑丈。

身長は高めで、流英と同じか少し高いぐらい。

## 補足

・流英以外は全員空を飛べます。まあ、その流英も準備は整ったのでそのうち飛べるようになると思います。

・術式について詳しくと言われたのでちょっと説明。ぶっちゃけるとそこまで深くは考えてないので。

術式は、気や妖力、魔力などを糸状にして組んだ物。多くのことをさせようとすればさせようとするほど大きく、複雑になる。

組み方でいろいろな性能が付き、複雑に組めばいくつかの性能を一つにつける事もできる。

大体は指を動かしてやるが、慣れれば指を使わなくても出来るようになる。

同じ性能を一つに重ねることもできる。ただし、二つ目まではともかくとして三つ目以降は二乗していくかのように難しくなっていく。

ここまでの応用が即席結界だ。一瞬で出来る限り『防』の術式を組む。

多分、難しくなっていくなら別々にどんどん作ればいいじゃないかと思う人も居ると思う。

が、もちろんそううまくはいかない。出来ないこともないが。

まず基本として、術式同士はそれなりの間がないと作れない。  
理由は簡単で、お互いに干渉し合って両方が打ち消されてしまう  
からだ。

無論、干渉しないように組めば別だが、それをわざわざするよりは重ねていくほうが楽。

いつだったか、流英は拳に『破壊』をつけた。これは、触れた物を破壊されやすくするという物。触れたら消滅するわけではない。

もちろん拳自体にも効果はあるのだが、流英の身体能力は前に書いたとおり高いため何とも無かった。そのせいで、それに気がついていない。

というのも、あの時は出来ると思ったからやっただけで、理解はしていないのだ。

・総合した戦闘能力

流英 > チルノ >> 大妖精 > ルーミア || 天翼

全力開放時。これだけ差があつて天翼がチルノと張り合ったのは、チルノがリボンを取り忘れたから。

ならば逆になぜ天翼と張り合ったのか。流英は妖精並みになると言っただじゃないか。

その通り。なのですが、チルノが強くなり、封印が効きにくくなつてきました。そう言うことです。

・身体能力

流英 > > チルノ >> > ルーミア 天翼 > 大妖精

身体能力のみ。使いこなせているかを考えても考えなくても大体こんな感じ。



番外編：説明と補足（後書き）

い。説明不足だった部分は大体補足出来たかと。何かあれば連絡ください。

第八話：復活した絆、生じた切れ目（前書き）

キャラに任せて書いていたら、いつの間にか無駄にシリアスに……  
そんなもって無駄に伏線も。

結構無理やりになってるかもしれない。

## 第八話：復活した絆、生じた切れ目

すっかり静かになった草原の真ん中に、二つの人影がある。

一つは腕を組み、胡坐をかく少年の影。

一つは手を地面につき、足を伸ばす少女の影。

……もとい流英こと俺、そしてチルノだ。

他の三人は帰っていった。では何故俺たちがここにいるのかと言うと……

「まずは基礎からな」

「わかった」

術式のテストだ。これだけ年月が過ぎたから、俺より上になっててもおかしくないのだが……

それでも俺に従うあたり、元は変わらないなあと思いつつ。

そんな俺の前で、真剣な顔で術式を組み始めるチルノ。もちろん、今やってるのは基礎なのでこう思う。

「……そんな顔しながらやるほど難しくないだろ？」

「流英の修行は全力でやりたいのよ!」

「そうですかい」

確かに前から無駄に真剣だなとは思っていたが、今回は特にすごい気がする。

「……出来た! これでいい?」

「流石に上手いな。俺より上手いんじゃないか?」

「無駄に寝てた流英が悪い……でも」

「ん?」

「あたいはずっと流英を追いかけ続けるからね！」  
「……そうか、ありがとな」

チルノの頭を撫でる。何故か、チルノの目標になれることが嬉しくて、無意識にやっていた。

「……んう〜……」

ふと顔を見れば、気持ちよさそうに目を細めながらそんな声を出している。

ハッと我に返り、やめる。俺は親k……もつこここまで来ると似たようなものかもしれない。

「……むう」

「いじけないでくれよ……」

やめると、不満そうな目で見てくる。やめてくれそんな目で見られると親心が……

「……次だ次」

「……わかったわ」

そうして時間は過ぎていく。

そのころ神社では、大妖精ルーミア天翼の三人で雑談を交わしていた。

「自己紹介はやってるからいいとして……天翼って何年ぐらい生きてるの？」

「ざっと一万年かねえ。あの辺りじゃ、一番年上だ」

「それじゃあ……残念ながら、天翼さんはここじゃ一番年下ですね」  
「……だろうとは思ったよ。なかなかちっこい癖して、馬鹿みたいな力を感じる」

「小さいとは心外ですね。あなたが大きいだけでしょ」

静かに怒りを見せつつ、反論する大妖精。大人しそうに見えるだけに、余計怖い。

「あ、ああ、悪かった。ところで……ルーミアって言ったか？ お前さん、使いこなせてないだろう？」

「……何を？」

「分かって言うか。その力だよ。お前さんから感じるそれは、統一が取れてない」

「……一発で見破っちゃうのね。その通りよ。もう諦めかけてるけどね……」

「それはまだ早いぜ？ コツさえつかめればどんどん使えるようになる。同じ妖怪の俺が言うんだから間違いない」

「一億年かけても無理だったのよ？ もう駄目に決まってるわよ……」

がつくり肩を落とすルーミア。が、天翼がそれを気にする様子はない。

「そりゃあ、無理だと思ってるりゃ何億年たつても無理だ。こういうのは、気持ちの持ちようだからな。」

……あんまり言いたかないが、俺は自分を褒めてここまでやって

きたんだ。

俺はもともと力が強かった。だから、上に立つことは決まっていた。もちろん俺の周りのやつは喋れないが、なんとなく分かったんだ。

だから、自分を騙してでも強くなる必要があった。……それだけの理由だな」

「……」

「でも、その結果が俺だ。少なくとも、力の扱いじゃお前にや負けない自信があるぜ？」

「……っ」

「おう、俺みたいな年下に見下されてどうだ？」

「……っく、このっ！」

天翼からは、俺には出来るといった自慢げな雰囲気が出ていた。

そして、ルーミアは途轍もない速さで天翼に飛び掛った。

「お前に何が分かる！ 知らない世界に放り出されて、彷徨って、流れ着いたこの場所！」

” 今度こそは ” 足を引つ張らないと誓ったのに！ クソッ！

「…… ちょっと言い過ぎたかね。お前さん、今の自分を見てみな。冷静にな」

「……」

顔は上げない。しかし、ゆっくりと拳から力を抜いていくルーミア。そして、目を見開く。

その時、ルーミアは完全に妖力を操っていた。

その後すぐにはばらばらになってしまったが、確実に操っていたのだ。

「……すまなかった。だが、あと少しだけ言わせてくれ。  
今分かっただろうが、気持ちの持ちようのできるんだ。まあ、怒  
りは少し別だがな……」

前向きに、前向きに考えれば、出来ないこともできるようになる。  
それさえ分かってももらえれば、後は俺がどうなるかと構わんさ」  
「……」

すつとルーミアは立ち、部屋へ戻っていく。  
そして、それを見ていた大妖精は。

「……天翼さんは、ひどいですね」

「そういう割には、随分と大人しい表情じゃないか。分かって言っ  
てるだろう？」

「……」あれ”みたいなことはまた起こしたくないんでね。俺が悪  
になっても救ってやりたいのさ」

「……それがなんだか分かりませんが……責任は、最後まで負って  
あげて下さいね？」

「もちろんだ。あくまで……」

「これはきつかけ作りだ、ですか？」

「……全部お見通ししてわけかい。こりゃ、敵いそうに無いね」

「……何でも分かればいい訳じゃないですからね。分かりたくない  
ことだって、分かっちゃいます」

「そう落ち込むことじゃないだろう。さあ、もうそろそろ解散だ」

そういいながら、天翼は立ち、居間を出て行った。

……で、幸か不幸かこの一部始終を聞いていた流英とチルノ。

「……複雑だねえ」

「ルーミア、大丈夫かなあ？」

「あいつなら大丈夫だろう。今は悩むだろうが……何れ、今より成長して戻ってくると思うぞ。」

「……とは言うものの、だ。」

流英は胸の前で拳を握り、ニヤリとして……

「来て早々やらかしてくれた件については別だ……後で一発殴ろう」

「え？ えっ？」

そのまま去る流英。おろおろするチルノ。

その後、気絶した天翼がチルノと大妖精に見つけられるのにその時間がかからなかった。

第八話・復活した絆、生じた切れ目（後書き）

次回以降、また時々冒頭に流英の日記が来ると思います。

第九話：いつの間にやら人間生誕（前書き）

題名通りです。九話だからってチルノネタやったりはしません。

## 第九話：いつの間にやら人間生誕

さて、天翼がやらかして早十万年ほど。そんなに経ったのに、あの出来事はこの間の事のように思い出せる。

10万年もあれば天翼とルーミアの寿命がと思ったが、両者とも何の変わりもないので大丈夫なのだろう。

「おーい、こつちだぞ！」

「何で当たらないのよ！」

「そう簡単に当たって堪るかっつての」

チルノの攻撃の命中精度の強化、及び俺の回避精度の強化だ。

簡単に言えば修行。最近はずルノに追いつかれそうだが。

理由は分からないが、俺の気やらがほとんど増えなくなってしまったのだ。故に、こつちやって技術の向上をしている。

まあ、もうここまでできて師弟関係なんて無くなってしまった。代わりに親子にでもなつた気がするが。

「……つとと、危ない危ない。考え事しながらやるもんじゃないね」

「むー、なんでそんなに余裕なのよ！」

「お前の攻撃は、パターンはあつても単調なんだ。だから読みやすい。お前が実際に食らうのが分かりやすいと思つぞ？」

と言いながら、俺は刀を取り出す。これは、この十万年で作った五本の刀のうち一本だ。

……とはいうものの、五本のうち三本はまだ製作中なので作ったとは言い難いのだが。

「お前の太刀筋を真似てやる。『防』を付けるから、万一当たってもそんなに痛くない」

「……わかったわ」

ここで言う真似とは、単純な真似ではないと言っておく。

俺の能力はやはり使い方によっては便利なので、相手の行動パターンを完全に真似するとかも出来るのだ。

現実と幻想をどうやってんものというのは割愛させてもらう。厳密にはだいたい違うが、こじつけられれば大体なんでも出来るのだ。

「それっ！」

「っ！……あら？」

チルノは警戒して大きく距離をとったみたいだが、別にそこまでする必要はない。

確かにチルノの一撃は速く、重い。が、それは相手の行動を読まず、行き当たりばったりにやっているのが一番だろう。

無論、当たれば俺でも百メートルは軽く飛ぶだろうが、回避しやすく隙がある故にあまり意味がない。

「おう、自分の太刀筋に驚くなよ……」

「あ、あはは……確かにこれじゃあだめね」

「がんばれよー」

と、今日の修行はこれでおしまい。チルノは恥ずかしそうにしつつ帰っていく。

ちなみに、今は朝の十時ごろ。こんな感じで終わればこれぐらいなのだが、遅いと夜までやってたりする。

ということだ。早く終わったので、散歩にでも行くでしょう。

俺は神社から草原を跨いだ森に居る。

妖怪の形もまともになつてきたなと思ひながら歩いていると……

「キシヤアアアアアアアア！」

妖怪の、悲鳴とも雄叫びとも取れる声が聞こえる。

妖怪同士で喧嘩でもしているのだろうか？

まあこの時代で喧嘩といえば意味のないことだが。

脳のある奴がほとんどいないこの時代だ。たとえ縄張り争いに勝つてもそれを張り合う相手が居ない。

……要するに、珍しい事だ。

「見に行くか」

……訂正。妖怪同士の喧嘩じゃない。

目の前に見えるのは妖怪と……

「人間……？」

そう、人間。断定できる条件はないのだが、俺の勘がそう告げていた。

人間は少女で、銀の長い髪に赤と青の服を着ており、目立つ。

手には弓を持ち、妖怪と戦っているようだ。

妖怪は蜘蛛のような奴。大きさとかいろいろ違うので蜘蛛と言ひ

切れない。

どちらもかなり傷を負っている。が、素の体力の問題で少女のほうを負けるだろう。

本来一騎打ちには横槍を入れるべきではない。……が。ここで見殺しにするのも気が引ける。何より……

「ちよいと、話がしてみたいんでね」

「ギジャツァ!?!」

一発。続けて二発、三発と殴っていく。

「シヤアアアアア……」

その声を確認し、手を見る。

貫かないようにしたので、手は汚れていない。

その後、少女のほうへ振り向く。唾然としているな、恐怖はあまり見えない。慣れているのか？

「……で、何しにきたの？」

「え、えと……っ、危ない!」

「ん?」

振り返ると、先ほどの蜘蛛が俺の目の前でかく口をあけていた。俺はそのまま食われ

る事はなかった。

「さっきから追ってきてるのがいるんだ。大丈夫だ」

言い終わったとき、蜘蛛には無数の線が入っていた。

さて、俺たちは場所を移して森の中の広場に行った。

「いやー、まさか追ってきてるとは」

「だって帰ってこないんだもん……」

蜘蛛を木っ端微塵にしたのはチルノ。その後、すぐにすべて凍らせてしまったので体液がかかったりもししていない。

「……で、あなたは何なの？」

「何だと思う？」

「分からないから聞いているのよ……賢者って呼ばれる身としては悔しいけどね」

「人間の賢者ねえ……まあ、お会いできて光栄ってところかな」

「やっぱり人間じゃないのね……」

「そうだとも。で、どうする？　もしかしたら俺はさっきの蜘蛛みたいに襲うかもしれないぞ？」

「別にあなたそんなことしなくても強いでしょ？　それに今実行されたら、どちらにせよ間違いない逃げ切れないわよ……」

「流英、もうそろそろ夜だよ」

「……おや、本当だ。じゃあ、俺は帰らせてもらおう事にしよう」  
「あら、どうして？」

「暗いから。それ以外に理由はない」

「……それもそうね。分かったわ、また会えたら嬉しいわね」

「ああ、じゃあな。それじゃチルノ、俺らも行くぞ」

「おー」

……そういえば名前聞いてないな。なんで俺って最初に名前を聞かないんだろう。

まあ、どうでもいいか。さっきの発言も気になるけど、そっちなもどうでもいいだろう。

そうして、俺たちは森の中へ消えていった。

## 第九話：いつの間にやら人間生誕（後書き）

書いてる途中、一回半分消してしまつて涙目になりました。

少女が誰だかは、わかりますよね？

刀の件及び天翼ルーミアの件は別に書きます。

活動報告にも書きましたが、おそらくこれから諸事情で投稿間隔が大きくなります。

## 第十話・危機感と再会（前書き）

ちよつと急展開かもしれませんがお許しください。  
ちなみに、今回の最初の日記は前回つける予定でした。

## 第十話：危機感と再会

俺が起きる直前にチルノが仲間にした……天翼と言ったか。

そいつは、妖怪の住処だった山の……妖怪の山とも呼ぶつか、とにかくその妖怪を纏めていたらしい。

そこでは、暗黙の了解として『一番力の強い者が自分達を纏める』  
というのがあったらしい。

大分前の『頂点は何をしなければならない』ではなく『頂点は何でなければならない』というものだ。

それに俺を当てはめるなら、俺は世界で一番に力が強くなければならない。

……今更だが、この問題に答えなんて無いのではないか、とは思う。  
いや、実際にはないのだろう。もしあるならば、それは未来が固定されたようなもの。

では何故考える？ 十人十色、それぞれの人生に違いはあるべきだ  
と言う。

……答えは簡単、怖いから。元々人間だった俺が、あるうことか世界の命運を常に背負って生きている。

余計な事やって、取り返しの付かない事になったら、目も当てられない。

だから、俺は『答え』を探す。無いとは分かっているけど、知りたい。自分でもどうかしてると思う。一つ言えるのは、少なくとも今は何も起こっていないという事だ。

日記より

流英の

「流英さん」

外から俺を呼ぶ声が聞こえる。大妖精だろう。少し焦っているような気がするが……

「んー、どうした……あ？」

……外を見て、俺は絶句した。  
遙か遠くなので良くは見えないが……  
白や灰色などの高い建物が見える。

「……町？」

こんなにはっきり見れば嫌でも思い出す、現代……いや、前世の言語。

「ど、どうかしましたか？」

「……行くぞ大妖精、嫌な予感しかしない」

「え？ え？ ……チルノちゃんじゃないんですか？」

「……別に俺は四六時中チルノのそばにいるわけじゃない。それに、少しお前に頼りたい事があるからな」

「……わかりました。協力します」

引き締まった表情の大妖精を連れて、俺達は神社を出た。

……一応手紙を置いておいたが。

神社から少しはなれたところ……とは言っても20メートルぐらいか。

そこで足を止める。

「……………？ どうしましたか？」

「力を貸してくれ。神社に隠蔽と防衛の結界を貼る。……念のためだ」

「了解です」

力を貸す・隠蔽は、両方共、やらせてみたら出来た事だ。

力は正確に、精密に渡してくれるので扱いやすく、

隠蔽は俺の術式を上回る。

さらに、両方を使って、擬似的に他人を操る事も出来るようだ。

完全な同意が必要な上、両者とも激しく疲労するのが難点だが……

今回はこれらを使ってもらい、まず俺を踏み台にして隠蔽結界を張ってもらおう。

そこに、俺が防衛結界を重ねる。それだけだ。

俺が踏み台になれば、ある程度俺の力が使えるようなので多少なり

とも楽になると思う。

「いきますー！」

瞬間、俺に魔力が注ぎ込まれる。やわらかくふわっとした感覚。妖精らしい力だと毎回思う。

……一度だけ操ろうと思った事があるのだが、無理だった。

魔力は、言う事を聞かない。飼い慣らせれば出来るかもしれないが……

「終わりました……っ、はあ……」

「お疲れ、ありがとう。気休めにしかならないけど、これ」

気を送ってやる。多すぎると毒なのであまり量は送れないが、気休めにはなる。

「ふう……ありがとうございます」

「それはこっちが言う事だよ。それじゃ今度はこっちの番だ」

俺は、自分の術式を大妖精の術式に絡ませていく。気と魔力が打ち消しあわないよう慎重にだ。

やがてそれも終わった。

「ふー……これで何かあっても安心かなー」

「……ところで、何故こんな事を？」

「さつきも言っただろ、念のためだ。嫌な予感しかしない」

「中からは出られるんですか？」

「俺の許可があれば通れる」

「厳しいですねえ……」

「まあ、そう言うな。それじゃ、行くぞー」  
「はいっ」

改めて、歩を進めるのだった。

やってきたは町。もう完璧に町だ。  
周りは壁で覆われており、大きい。  
どうやら、門からしか入れないようになっているらしい。

「……まあこの程度どうって事ないんですが」  
「ですねえ。早く突破しちゃいましょう」

自分達に隠蔽をかけつつ、壁を駆け上がる。  
途中、気のような物が蹊を塞いできたが、式が組み立てはしないの  
で拡散させる。  
一応通つたら戻しておいたが。

町の中。おそらく大通りであるところを歩いている。  
姿を隠していないが、そばを通る誰もが俺達を気にする事はない。

「……やっぱり隠蔽って便利だな」  
「大部分は流英さんの能力で構成されてますけどね」

どういふことかというと、大妖精の技術に俺の『幻想』を乗せて、  
完璧に人間に見えるようにしているのだ。

「しかし、すごいなあ……」

「そうですね。見た事ないものがたくさんあります」

「……ところで、今更だがその口調は何かならんのか？」

本当に今更だが、やたら丁寧な口調だなと言う事で。

「何回か言われた事がありますが……素での口調なので、どうしろといわれましても……」

それに、大妖精は困った表情で返す。そうか。素か。

「……まあ、いきなり軽い喋り方になったらそれはそれで違和感だけだ」

もう大人しく静かな雰囲気になってきているからだ。

本当にやられたら第一声に「お前誰だ」という自信がある。

「え、えーっと、流英……さん、向こうになんかあるよ？」

「お前誰だ!？」

……閑話休題。

さて、大妖精の言う建物にやってきた。

周りと比較しても一段と大きい建物だ。おおよそ、この町の中心部

とかそんなだろう。

「……侵入用意」

「……はいっ」

笑顔で答える大妖精。元が妖精だからか。

長い廊下を歩く。周りは鉄の壁だ。同じような景色が続くので、進んでいるのかわからない。

「……おっ」

と、一番奥に、他より大きめな扉がある。数字やらを入力して開けるタイプの扉のようだ。……まあ使いませんが。

「すーっと」

「何回やっても慣れませんね……」

どうするかは単純明快、すり抜ける。

難点としては、すり抜けの途中は他の事ができないこと。後、その中を移動するので景色も何もなく、気持ち悪いことだ。

「ふう」

「侵入成功！」

達成感にあふれる笑顔を振りまく大妖精。気を抜いて隠蔽を解かないことを祈る。

「……どうして……」

と、奥のほうから人の声がする。会議でもしているのだろうか。……というか、この声、聞き覚えが……

近づくと……

「……わお」

この前の銀髪少女と、アマテラスがいた。最後にあったのはいつだろうか。

と、アマテラスが少女に気が付かれない様に一瞬驚き、ニコツと微笑んだ。

どうすればいいのかわからないので、手を振っておく。

……というか見えてるのか。さすがに格が違った。なんせ俺ぐらい生きてるしなあ……

話し合いが終わったようだ。

面白くなりそうなので、隠蔽を解いてみる。

「久しぶりだな、アマテラス」

「っ！？」

「そうね。かれこれ2億年は経ってるものね」

「は、はじめまして……」

少女は飛び退き、アマテラスは笑顔で返し、大妖精は縮こまっている。

知らない顔の二人に会ったらまあそうなるか。

「……って、あなたじゃない。おかしいわね、セキュリティは万全のはずなのだけど」

「すり抜けました」

「……はあ」

あきれた顔をする少女。

「はじめまして。私はアマテラスって言うのよ」

「は、はい、大妖精です！」

あつちはあつちで自己紹介か。

「……で、この前聞き忘れたんだが……名前は？」

「八意××よ。あなたは？」

「刃勇流英だ。しかし、××ねえ……なんとも言いづらいな」

「あら、むしろ言える人のほうが少ないわよ？ まあ、普段は永琳って呼んで構わないわ」

「わかった、そうしよう」

こっちは終わり。

大妖精は……

「うう……」

「かわいいわね」

……顔を真っ赤にしてアマテラスに頭を撫でられていた。

やがて、やる事は終わらせた。

「あと、すり抜けられるのは気味が悪いから、普通に入場許可出すわよ」

とかも言われたが。

さて、帰るとしよう……

……依然嫌な予感が晴れないのは、気のせいだと信じたいが。

## 第十話：危機感と再会（後書き）

八話振りのアマテラス。

前回の少女は、永琳でした！ …… いやすいません。

後、今更申し訳ないのですが、歴史改変と一部原作設定無視があります。

キーワードに付け足しておきます。

第十一話：人妖大戦争・前夜（前書き）

思うように書けない……

なので、この辺をさっさと飛ばしてしまいたいのが出てくるかもしれません。

クリスマスなんてなかった……

## 第十一話：人妖大戦争・前夜

白い壁で覆われた部屋の中。

大きな目の机を囲うように、七人の者が椅子に座っていた。

「……月に移住、ねえ」

沈黙していた中でそう切り出したのは、困り果てた顔の流英。

「ええ……でも、問題はそこじゃないのよ」

それに返すは、諦めたように苦笑する永琳。

「妖怪が、それを阻止するために総攻撃を仕掛ける、ですか……」

「俺の……いや、今は流英か。山の妖怪共には干渉しないように言  
つてあるが……」

「一応だけど、天界も関与しないわよ」

大妖精、天翼、アマテラス。全員疲れた顔をしている。

「じゃあ、あたいらが妖怪を倒せばいいんじゃないの？」

「残念ながらそれも行かない。元々、俺達はどちらとも関係が無い  
からな。」

むしろ、どちらかというなら妖怪側だ」

方針の一つと考えられる意見をチルノが出す。  
が、無理だと流英に返される。

「……事が大きすぎて、付いていけないわ……」

そして、話についていけないルーミア。

「計画の中止、最悪でも遅延ができればいいのだけどね……上の人  
が聞いてくれないのよ」

「……俺たちは全く関与しない、と言う手もある。ぶっちゃけ、理  
屈ならそれが正しいだろうし。」

でも、話を聞いてちゃったからには……どうにかするしかないよな  
あ

「逆に、どちらとも敵対するって手もあるにはある。戦争関係者全  
員を倒せば必然的に争いは収まる」

「第三勢力か。それしかないかな……」

「それなら、できるだけ関係する人数を減らすように動けば被害は  
抑えられますね」

「……そうね、人間としては苦しいものがあるけれど……私からも  
声をかけてみましょう」

「……わかった、そうしよう。もし、関わる理由が命令だけの奴ら  
がいれば俺に言ってくれ。隔離して生存を約束しよう」

「妖怪は、俺たちがなんとか話をつけよう。賢い奴が全くいないわ  
けじゃあるまい」

「話はまとまったな。俺たちは……」

流英が、話し合いの内容を要約していく。

- ・ 第三勢力として動く
- ・ 戦争に関わった者のみ倒す
- ・ 人間側で、戦意が無い者は流英が隔離する
- ・ 妖怪側は、天翼達ができるだけ関わらせないようする

「……永琳、悪いな」

「自業自得だと思えば、大丈夫よ。……その代わり、成功させてね

「？」

「……約束しよう。俺たち五人は、命……いや、誇りにかけて成功させよう」

「あら、訂正するのね？」

「残念ながら、半分は不死身だからな」

こうして、会議は終わった。

この会議は、初めて町を訪れてから5年ほど経った頃のことだ。適当にぶらぶら歩いて、いつも通りに永琳達のいる部屋に来た。そこで珍しく椅子に座って悩んでいた永琳に話を聞いたら、月への移住が決定したとのこと。

そして、先ほどの会議になったのだ。五人そろっているのは、俺が呼んだからだ。

ちなみに、永琳は普段、いろんな色の液体の入ったガラス瓶を手に持って何かをやっている。

『あらゆる薬を作る程度の能力』を使って、実験などをやっているらしい。

永琳によれば期限は3年。それまでに俺達は、できる限りの人妖をこちらに引き寄せなければならぬ。

強制的に引き寄せるのは、結局後の争いの元なのでやらない。あくまで説得だ。

「チルノは修行に励んでるし、大妖精ルーミア天翼は妖怪回ってるし……」

「そうだな、チルノと手合わせしようか」

隔離の要求はあまりこない。だからと言ってぼーっとしていれば、脳裏によぎる最悪の展開。

情けない、甘い話だが、俺は殺しに抵抗がある。これで、自我を失ってもおかしくはないのだ。

チルノは、草原の真ん中にいた。明らかに身の丈より大きな氷剣を軽々と振り回している。

「どうだ、チルノ」

「あ、流英。なかなか良いよ。でも、どうしたの？」

「ちょっと手合わせ願えないかと思ってね。最後にやったのはいつだったか……」

「わかった。丁度、新しい技を思いついたのよ」

「奇遇だな、俺もさつき思いついたんだ」

「それじゃあ……」

剣を生成しなおすチルノ。楽しそうな、期待しているような表情だ。

「ああ……」

刀を一本引き抜く俺。俺はどんな表情なのだろうか？

「「始めようか！」」

刀と剣はぶつかり合い、すさまじい金属音をたてている。  
普通なら目に追えない速さで繰り広げられている至近距離での猛  
攻撃。

かと思えば、今度は離れての射撃勝負。  
距離をとると、もちろん技は出しやすくなる。

「氷符「アイシクルマシンガン」」

「相殺弾丸！……氷符？」

「なんとなく付けてみただけよ！ 続けていくわよ、氷符「アイシ  
クルフォール」！」

「じゃあ習ってみようかね。反射「リフレクションフォール」」

流英を取り囲むように迫るつらら弾幕。

しかし、流英が放つ弾丸の壁で全て明後日の方向へ飛んでいつて  
しまった。

……が。

「くっ……だめだな、改良が必要だ」

流英がグラツと傾く。

これを好機と見たチルノは、もう一回技を出した。

「氷塊「グレートクラッシュャー」！」

「がっ！？」

対応できなかった流英は、もろに食らってしまっ。

「……中々きついな。じゃあ、こっちからも一発。

既斬刀「軌道無き斬撃」！」

「……え？」

そう言うと、チルノが硬直する。ゆっくりと顔を下げ……  
服に一筋の線が入っているのを確認した。

「あくまで手合わせだから、それでおしまい。なかなか使えるかも  
しれないな……」

「……いや、あはは。こんなにあっさり負けちゃうとは思わなか  
った……」

「いやいや、ちょっとずるい手使ったからね……謝ってもいいぐら  
いだ」

「どうやったの？」

「この既斬刀は、文字通り『既に斬れていた』を再現できるんだ。

実際は時間を少し操ってるだけけど」

「へえ、すごいね……別に、作れたんだからいいんじゃない？ ず  
るいとは思っけど」

言葉ほど驚いてはいないチルノ。流英のチート性能は熟知してい  
るのだ。

とまあさつきまでの戦意はどこへやら。そんなことを言い合いつ  
つ、二人は帰っていった。

話が出てから半年経っただろうか。妖怪の山の妖怪から、

「ロケット、もうすぐらしいですけど？」

と言われたのだ。

「まさか。予定は二年半後だぞ？」

「あっしには詳しいことは分かりませんが。噂で広まっているんですあ。」

そういうわけで、攻撃を仕掛ける妖怪さん達は準備を整えてるらしいですけど」

「……なんてこった」

それなら、噂が嘘だろうと本当だろうと、戦闘は起きる。

作戦は別にいい。もとより、そこまで多く引き寄せられるとは思っていないかったからな。

それより、3年かけてやる修行をしていた俺達は、未完成で行かなければならないということのほうが大きい。

そして、もし本当だったとすれば……

「上がそれ以外に何かを考えているのは間違いない、か」

「……どうしたものかねえ、本当に」

「……できるだけのことをやるしか、無いでしょう。この際、犠牲について考えてる暇はありませんから」

「そうだな……下手すれば、明日始まってもおかしくなさそうだからな。」

全員集めてくれ。作戦会議と行くこうじゃないか」

「……だから、できるだけ急がなきゃいけない」

「永琳に連絡は取れないの？」

説明をすると、ルーミアがもつともな意見を出す。

だが……

「それは無理だ。噂が本当であれば、今頃永琳はロケットに関わる何かをやっているだろう。」

そしたら周りに誰かいるだろうし、永琳に迷惑だ」

「……じゃあ、どうするんだ？」

「この前軽い偵察をしたとき、どっちも軽く10万はいたと思う。だから、できる限り力を蓄えろ。」

寝る必要が無い奴はぶっ通しだ。隠し玉をもっている可能性は否定できないからな……」

「それぞれの立ち回りはどうするんですか？」

「臨機応変……といたいだが、まったく無策なのもきついだろうし、少し考えよう」

一旦の沈黙。

「……援護は、私に任せてください」

と、その沈黙は大妖精が破った。

「ああ、任せた。大妖精の補助能力は抜群だからな。」

あと、チルノ。お前は俺と一緒に前で戦うぞ」

「分かってるわ」

「ルーミアと天翼はそっちで考えてくれ。そのほうが都合がいいだろ？」

「よく分かってるな。それじゃ、こっちで組ませてもらおうぜ」

全員の担当を決めたところで……

「それじゃあ、チルノ、大妖精。付いてきな」

最終調整だ。全員、万全の状態にしなければならない。

天翼達は……まあ、あの二人なら何とかなるだろう。いろんな意味で。

## 第十一話：人妖大戦争・前夜（後書き）

なんか自分で書いてても良くわからなくなりました。

とりあえず、次話（もしくは次々話）にでかい戦争が起こると言うことです。

次々話かもしれないのは、半分忘れかけていた天翼とルーミアの話を書くかもしれないから。

流石に伏線未回収は……ということ。

第十二話：回想「天翼とルーミア」（前書き）

遅くなりましたが皆さんあけましておめでとございませう！

やっぱりこっちを書きました。

今回は、結構思うがままに書けたと思います。

……が、矛盾がありそうで怖い怖い。

## 第十二話：回想「天翼とルーミア」

地球を賭けた壮絶な戦争が起ころうとしている。

だが、今回は幾万年か時を遡るとしよう。

具体的には、天翼が仲間入りした辺り。

天翼とルーミアは、あの数十万年で何をしていたのか？

天翼視点でどうぞ。

「……これは、ちょっと面倒になったねえ……」

傷をえぐるつもりは無かったが……というのは言い訳だ。

そもそも怒らせる時点でこれぐらいは覚悟しておかないといけな  
いだろう。

「……まあ、決めたことは最後までやり終えましょう」

自分で言うのもあれだが、この信念が能力を持っていない代わり  
ぐらいに思っている。

もとは流されやすく、止まりやすい性格だったんだがなあ……

この変わりようは、自分でも分かるぐらいに大きい。

……などと考えながら着いたのはルーミアの部屋。

「……ルーミア、入るぞ」

「……」

返事は無い。だが気配はするので、わざとしないのだろう。  
意図してないとはいえ傷をえぐったわけだしな。

すーっと襖を開ける。

ルーミアは、座布団を枕に伏せていた。

聞いているかはわからないが、とりあえずこれは言わなければならぬ。

「お前に何があつたかは知らんし、知るつもりも無い。だがな、俺はお前を妖力の使える妖怪にする。その気が無い、諦めると言うのであれば俺を倒してみろ。もっとも、昨日も言ったが……今のお前に、負けるつもりは無い。力は、上手く扱ってこそ最高の強さとなると俺は思ってるからな」

言い訳となるような事は言わない。しっかり、俺のやることを伝える。

こんなところで世辞を言っても意味はないからな。

……さて、聞いていたかどうかは分からないが……

「ちよっくら、外に出るとしようかね」

ルーミアは、背負っていくことにした。やはり、寝てはいないらしい。

抵抗の素振りも見せたが、どう考えても本気じゃないので理解はしているのだろう。

……初めて会ってから一日しか経ってないのもあってどう見ても誘拐だが、余り気にしない。

「おう天翼、誘拐か？」

「似たようなものだ」

「認めるんかい。いや何するかはわかってるからいいけども」

「りゅーえいー……」

「……まあなんだ、がんばってこい」

「うう」

主人に見捨てられるルーミア。こいつ絶対わかってやってるだろ

……

「あーあと、しくじったらぶつ飛ばす。やるからにはちゃんとやれ

よっ」

「分かってるさ。俺だって理由も無くやってる訳じゃない」

ということ、外に出よう。

「さて、始めるとしようかね」

「……私のトラウマ穿り返した分教えてよ？」

疲れたようにも諦めたようにも見えるルーミア。多分両方だが。

「そんなこと普通本人は言わないと思うが……まあ、何がなんでも成功させてやるんじゃないか」

「……今更だけど、なんでそこまで私に肩入れするのかしら？」

「……それを説明するには、昔話をしなきゃならない。そんな大した事じゃないがね。」

「聞かせて頂戴」

「……今から八千年ぐらい前のことだ。自惚れるつもりはないが、俺は他の奴より力も知恵もあった。とは言っても、他の上位と比べ

ればそんなに差は無かったが」

……そんなある日のことだ。今と違って一つの事に集中するのが苦手だった俺に、

「力一（以下妖力）の使い方を教えてくれない？」

と声がかかった。やる事が無かった俺はそれを二つ返事で引き受けた。

最初は良かった。だが、途中から他の事が気になり始めた。結局、中途半端に教えてそれは終わってしまった。致命的なミスを犯した事にも気が付かないでな。

そいつは、偶然か分からないが数日後に他のところの妖怪と争うことになった。

もちろんそいつは俺の教えた欠陥に気が付かないまま妖力を操り

死んだ。

俺はそこにいたわけじゃないから分からない。だが、偶々近くを通ったらしい奴に、

『その妖怪に殺された』じゃなく、『自爆したようだった』と言われた。

俺は死ぬほど後悔した。あの時、中途半端に教えていなければ助かっていたかもしれないのだ。

この出来事で、俺は『貫き』を手に入れた。

何に対しても全力で行動する、少々やりすぎな物だったがな。

だから、他からきた傷だらけの妖怪に

「助けてくれ」

と求められたとき、俺は妖力を全力で注ぎ込んだ。もちろんそいつは耐えられず死んだ。

前の間接的なものと違い、俺が直接殺したのだ。

それから、何日も、俺は何もしなかった。木の上ですつと座つてな。

声をかけられても反応しない、まるで抜け殻のようだと後に言われたぐらいだ。

そんなときだ。知らない奴が、俺のそばに来た。

「どうしたのですか？」

そいつは男だったが、聞いたことがないぐらいに柔らかい声でそう言った。

それに驚いて、俺は反応した。本当に反応だが。

「んあ……？」

「……あなたには後悔が積み重なっているように見えます。

悩むのは悪いことではありません。しかし、悩み過ぎ、

果てに何もできなくなるようでは意味が無いでしょう？」

過ぎたるは及ばざるが如し、と言っ言葉があります。

やり過ぎは足りないことと同じぐらい良くない事、という意味です。

適度な按排を見つけないさい。そうすれば、きっとあなたの気持ちも晴れると思いますよ」

そいつは、そんなことを俺に、相変わらずの声色で言った。

言葉だけに見れば偉そうに聞こえるかもしれないが、

そのときの俺には救いの言葉に聞こえたよ。

「……お前は誰だ？」  
「……さあ、誰でしょう。もしまた会うことがあれば、教えるかもしれない」

誰だか聞いたが、結局誰だか分からなかったな。

「……そして、回復していったのが今の俺だ」

「……連れ去る時点でやりすぎだと思っけど？」

「悪いが、妖力が絡んだら抑えられないのさ。死んだ二人は、両方妖力が関わってるからな」

「死因が自爆なのは嫌ね……」

「ははは、その辺はちゃんとやるさ。それが、俺の能力のようなものだからな」

「『物事を貫き通す程度の能力』と『適度に加減する程度の能力』って所かしらね？」

「まあ、そんな感じだろうな。実際能力として覚醒しているわけじゃないから正確じゃないが。……ところで、お前さんは能力を持っているのか？」

流れて気になったことを聞いてみる。

「……分からないわ」

「おや、あるないじゃなくて、分からないと来たか。流英とやらに教えられてないのか？」

「やり方は教わったけど、よく分からないのよ……それっぽい現象も無いし」

「ふむ……ちなみに、なんて教わったんだ？」

「目を瞑って念じれば分かる」

「ああ……えー……間違っちゃいないけど確かにそれじゃ分からんわな」

「……ん？ 能力持つてないんじゃないの？」

「妖力やら、そのの量とか見るのも似たような感じなんだ。本当に一致してるかは知らんが」

「へえ……じゃあ、どうやるの？」

「ちよつとコツがいるんだ。とりあえず、言った通りにやってみてくれ」

細かく指示してやってもらう。一度出来ればあとは楽なのだが……

「ちよつと時間がかかったな。ま、想定範囲内さ」

「確かにちよつと独特ね……普段の生活でこんな力の入れかたしなもの」

「その代わり、一度分かれば体が覚えてくれるから楽だからな」

んで、肝心なルーミアの能力はだ。

「しかし、『闇を操る程度の能力』とはねえ。やってみないと分からんが、随分応用の利きやすそうな能力じゃないか」

「……自覚はしても、実感はないわね。本当に使えるのかしら？」

「自分で自分に嘘をついてどうするんだって話だな。自問自答するようなもんだし」

「へえ。それで、これからどうするの？」

んむ……まあ、取りあえずは……

「妖力を最小限にまで減らさせてもらおうか。今のままじゃ、纏め上げる力の無い指揮官が大勢の妖怪を従えてるようなものだ」

「……やっぱり直接言われると辛いわね」

「別に今世辞を言っても意味はないからな。で、だ。減らす分の妖力は俺が預かる……と思ったのだがな」

一呼吸置く。

「さつき背負ったとき、ちよいと探らせてもらったんだが……どうにも、俺のものと相性が悪いらしい。だから下手に取り込むと、俺の妖力もろとも消し飛んじゃまう。と言うわけで、何か案がないか考えたいんだが……」

「その辺は流英の模範ね」

「む、そうなのか。じゃあちよいと聞いてくるか……できるだけすぐ戻るから、待っていてくれ」

足に力をこめる。腕を使ってバランスを取りつつ、蹴る。忘れられてるかもしれないが俺は鳥妖怪だ。

「と言う事で戻ってきた」

「早いわね」

手に持っているのは、白い線の入った赤いリボン。流英に話したら一分もかからずに作ってくれたのだ。

しかし、見ていたが何をやっているのかはさっぱりだったな……

「まあとりあえずこれを付けてくれ。後、本人が言うには脱力感が

半端じゃないらし……」

「うあ〜……」

「……手遅れか」

崩れ落ちるように入たり込んだルーミアを横目に、空でも見ているとしよう。

始めてから何年経ったかは分からないが、兎に角言えるのは俺の教えられることは全て教えたということだ。

扱いきれなかった妖力を全て適切に使えるようになったルーミアは、やはり強い。

というか俺じゃもう手に負えないが。結局は宝の持ち腐れだったということだ。

「さてまあ、修行は今日でお終いだ」

「改めて自分の妖力の大きさが分かったわ……流英って、これより全然大きい物を持っているのよね」

「……それは気にするな。俺だって悲しい」

「ふふつ。珍しいわね、天翼がそんな事言うなんて」

「俺をポジティブ思考の塊みたいに言うんじゃない」

「……まあ何はともあれ、こうして使えるようになったのも天翼のおかげよね。ありがとう」

「そんな大したことはしてないだろう。終盤なんて、どっちが教えているか分からなかったぞ……」

「あら、好意は素直に受け取っておくものよ？」

「……全くな、どうしてこうなったやら」

若干性格が変わった気がするが……これで、俺とルーミアの修行は終わった。

第十二話：回想「天翼とルーミア」（後書き）

何をやったかは省きました。軽く考えてみましたが面白くなさそうだったので。

で、今回は会話文の改行を無くしてみました。見づらくなっていたら  
すいません。

次回、第一章最終話！……というとかっこいいですが実際そこまで  
すごくない予感。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0414z/>

---

東方幻実神

2012年1月2日17時52分発行